

## 第1章 戦場

中国からの引揚げ

# 中国人にも助けられた終戦後

わたなべさちこ  
渡辺幸子さんのお話から

○満州鉄道 長春・旅順間の鉄道や鉱山・製鉄などを経営するために、明治三十九（一九〇六）年、大連に設立された半官半民の国策会社。正式名称は南満州鉄道株式会社。

○ノモンハン 「満州国」とモンゴル人民共和国の国境付近。

○野戦病院 戦場の後方につくり、負傷者や病人を治療する病院。

○スنگアリー 中国東北部の大河「松花江」の「満州国」読み。

私は、大正十（一九二一）年に、中国の大連と旅順の中間にある砂河口という町で生まれしました。父は満鉄（満州鉄道）に勤めていました。昭和十六（一九四一）年ころ、私の兄は結婚してハルビンにいました。私は兄を頼って、一人で、当時日本が統治していた朝鮮を通じて「満州」のハルビンにきました。私の夫は、小樽の入船町の薬問屋の六男なのですが、軍隊を出てから、友人を頼ってやはりハルビンに行きました。そこで私の兄と友だちになったので、それが縁で私たちは結婚したのです。私が二十三歳の時です。

夫は衛生兵として、ハルビンの市役所に勤めていて、戦争中、ノモンハンという地に行きました。機械が好きで、車に乗って移動したそうです。兄もノモンハンに向かっていましたが、兄は将校にもかかわらず徒歩だったため、一度だけハルハ川という川の河畔で二人が会ったときに「車でいいねえ」と、兄は夫に言ったそうです。夫は負傷兵を野戦病院に運ぶ仕事だったそうです。兄はその後戦死しました。

私は、当時、大きな会社に勤めていました。貯蓄や保険を扱ったり、宝くじを売ったりする銀行のような会社でした。中国人は宝くじが好きで、とても流行っていました。スنگアリーという海のように大きい川があり、その河畔の別荘にロシア人や日本人のお金持ちが住んでいました。夏は遊技場もあって、私は宝くじを売りに行きました。また、私は、中国人が来るピアホルでも働いていました。でも、治安が悪くて、明るいうちに帰らなければならず大変でした。ハルビンはとても寒くて、シューパーという綿が入った毛皮のオーバーを着ていました。

終戦後も、ハルビンには一年ぐらい住んでいました。お金はなかったですし、また、日本のお金も敗戦で使えなくなっていました。食べるために、日本人は持っているものを中国人に売って、生計を立てていました。そのころ夫は、ハルビン郊外の警備兵けいびへいとして召集されていました。

中国人に親切にしてもらったことを覚えていきます。終戦後、日本人狩りが始まったというのを中国人が教えてくれました。ソ連軍が「満州」まんしゅうに入ってきて、日本人をシベリアに連れて行きました。私は主人と一緒に逃げて、いとこのところへ身を寄せました。身を寄せるまでが一苦勞で、日本人と気づかれないようにと、主人を真ん中にして中国人が二人で挟んで三人で話しているふりをしながら、歩いて、いとこの家に逃げたということです。私はあとで別に動きました。

主人の兄弟は、シベリアに連れて行かれました。薬剤師と会社員をしていたのですが、薬剤師をしていた方は二年くらいで帰ってきました。役に立ちそうな人だと見



ハルビンの街並み

イメージ図

○葫蘆島 現在の遼寧省  
西部の葫蘆（旧葫蘆）島  
市。この港が「満州」から  
日本への引揚船の出発地  
となった。

られて、木の伐採などの過酷な労働ではな  
く、ロシア人の家庭で使われていて無事で  
した。会社員の方も、経理をやっていたの  
で、人に使われて大丈夫だったようです。

一年ほどハルビンにいて、日本に戻る時  
期を隣組がきちんと知らせてくれて、夫と  
一緒に葫蘆島という場所を経由して日本に  
引揚げました。ハルビンから葫蘆島に着く  
までには四十日もかかりました。

経由地では、学校の校舎に泊まったこと  
があります。その学校に着いたのは十月ご  
ろで、私たちは、リュック一つしか持って  
おらず、とても寒かったことを覚えていま  
す。先に着いた人たちは学校の校舎に入れ  
ましたが、後から来た人たちは野宿をしま  
した。トイレは、学校のトイレでは狭くて  
足りないのので、外に長い溝みぞを何本も掘っ  
て、溝に板を渡して、周りをアンペラというゴザの  
ようなもので囲って、用を足しました。私  
は恥ずかしくて、朝早くに行きました。

中国人は、日本人の集まるところにすぐ店を出して  
いました。中国人は商売上手で、ゴザで



イメージ図

引揚船の出迎え

○中国残留孤児 終戦後、満州からの引揚げの際に肉親と離別し、中国人に育てられた当時12歳までの日本人をいう。

困ったようなすぐ壊せる粗末な屋台で、芋やおにぎりを売っていました。私は、店を開いている中国人に片言の中国語で話を付けて、雇ってもらいました。夕方から夜の店じまいまで、芋を洗ったり米を研いだりしていました。お客さんは皆日本人なので、私が注文を聞きました。仕事の帰りには、お金をくれました。いくらでもいいのでもらえればいいと思っていました。が、私をかわいそうに思ってくれて、芋の残ったものを包んで、主人に持って行けと持たせてくれました。それだけでも助かりました。いろいろと辛い思いをしましたが、食べ物に満足に食べた記憶はないですね。

「満州」南部の葫蘆島に着き、そこで日本行きの船に乗りました。船には二日間くらい乗って、九州の佐世保に着きました。佐世保に着くと、岸壁で白い前掛けを着た婦人会の人を迎えに来ていて、マイクを使って大きな声で「あなた方の帰りを一日千秋の思いで待っていました」と言ってくれました。帰ってきた人たちは皆泣いていました。やはり自分たちの国が一番だったのでしょう。

今になって思うと、「満州」にいた時には、周囲に旦那さんをなくしたり子どもを中国に置いてきたりした人がたくさんいて悲惨な時代でした。毛布一枚くれる人もいなかったのです。みんなが貧乏していました。「満州」から引揚げてきた人は、戦後は自分の力で立ち上がりました。あのような戦争時代の苦勞を二度と経験したくはありません。みなさんには、今の平和な時代を大切にして生きてほしいと思います。

**DATA**

平成23年度豊平区平和事業  
聞き取り

- ・平成23年10月12日
- ・自宅



**渡辺幸子(わたなべ・さちこ)さん**

- ・大正10(1921)年生まれ
- ・札幌市豊平区在住